

和歌山紀北教会堅信式 天の父のように



2月19(日)10時過ぎ、和歌山紀北教会で酒井俊弘司教の主司式のもと、12人が堅信の秘跡を受けた。当日200人の信者が集い、中学2年生から年配まで幅広い年齢層の共同体仲間の門出を祝った。

酒井司教はミサ説教で、
第一朗読(レビ19・1-2、17-18)と福音朗読(マタイ5・38-48)で読まれた「……なりなさい」との神からの強い勧めについて「天の父のような完全な者になれるか？」をテーマに話された。完全無欠である

主催者の感想

堅信の準備期間は受堅者にとっても、一緒に学んだ皆にとっても良い学びの機会になったと思います。この

受堅者の感想

雨模様でしたが、受堅者には子どもたちが多くて、明るい気持ちで臨めました。私たちが夫婦は実年齢では高齢者ですが、信仰においては幼い者で、少しは大人に近づけるのかなと思えました。神様のみことばを味わいながら、聖霊を願い、認識できるように過ごして



使徒たちと同じ人数の12人の受堅者

いきたいと思います。偶然ではない神様の恵みに感謝いたします。



司牧者がリレー形式で若者たちにぜひ読んでほしい書籍を紹介し、青年たちの読書感想文を掲載する連載。今回は、パウロ・セコ神父様(和歌山紀北教会)が担当。

パウロ・セコ神父からこの一冊



『読むだけで人間力が高まる100話』(モラロジー道徳教育財団「ニューモラル」仕

事と生き方研究会著 2022年、税込1210円)

私は復活祭後にしばらくの間、スペインに帰ります(3年間の予定)、行く前に皆さんにこの本を紹介したいと思います。コロナ禍になり、一堂に集うことが困難になり、人と人とのつながりが希薄になって3年になります。一日も早くイエス様を中心に人びとがつながりを深めて空白の時間を埋められたらと願います。聖書のみ言葉(イエス様の良い知らせ)をどのように生かして実践していくかを考えたとき、この本がヒントになるのではないかと思います。道徳教育財団から出版されているので、皆さんの中には宗教と道徳は別物でしようと思われる人もいます。この本を勧める1つ目の理由は、教皇フランシスコが2022年11月30日の一般謁見演説「10. 真の慰め」で「日々、良心の究明

を行うことがとても大切」と言われたことにあります。では、どのように良心の究明をしたらいいのか? この本には「自分の心を謙虚に見つめ直し、起きたことに気づき、心は成長できたかを確認する。そしてそれを習慣づけていく」とあります。究明はマイナスのことに目を向けがちですが、ありのままの自分を謙虚に認め、失敗した時に、ずっと悩まないで、その失敗から立ち上がって、やり直すことはとても大切です。究明し、自分を良くする決心をし、歩み出していく。このことが普段の生活でできるなら、良い時も悪い時も日々、新たな気持ちで出発でき、心も成長するのだと思います。

2つ目の理由は、聖パウロのテサロニケの信徒への第一の手紙5章16-18節「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」が私の好きな聖書箇所だからです。この本には「感謝の心を忘れず、苦労や苦難をも『おかげさま』という発想で受け止めることができれば、人生はよりよい方向へと導かれていく」とあります。何事も感謝できる人は前向きで喜びをつくるのが上手な人です。頑なに成りがちな私たちの心ですが、見方、聞き方をプラス思考に変え、感謝の心で取り組みましょう。

イエス様の復活はまことの喜び・希望・新しい命を与えます。《あなたの息吹を受けて、私は新しくなる》。新年度のスタートを切るにあたり、短い100話の話を分かりやすく書かれていますので、この中から関心のあるものをセレクトして読み進め、心機一転、あなたの人間力を高めてみてはいかがでしょうか。

次回は、赤波江豊神父様(神戸東B共同・豊岡小教区管理者)です。

ラジオ 信仰の時間

父の思い出 (2月12日放送分)

松浦 謙(みなとブロック)

南山大学の教授だったわたしの父、松浦一郎は、近世ヨーロッパの哲学思想を専門に研究していました。

父は、理性を通して、神の存在を証明しようと努めました。わたしは、中学生のころ、なぜ神がいると証明できるか父から説明してもらった記憶があります。その一つが哲学者デカルトの神存在の証明でした。それは次のようなものです。

そもそも人間は、疑う存在である。つまり、自分が不完全で、限界があるということを知っている。そのような自覚があるのは、自分の中にある無限な者、すなわち「神」の観念がもともと備わっているからだ。ではそれはどこから与えられたのか? それは無限な存在者である神から来たとしかしいようがない。だから神は確かに存在する。それを聞いても、わたしは正直いって、良く分かりませんでした。

退職後父はがんを患いました。かつての教え子たちが集まって父の話を聞く会が開かれたので、わたしは、母と兄と一緒に、聞きに行きました。この時父は、かなり弱っていましたがパスカルの「幸福論」について語ってくれました。おおよそ

の内容は次のようなものでした。

パスカルは、デカルトと同じように人間の有限性を取り上げることから出発する。パスカルによれば、人にはいのちへの欲求がある。真の幸福とはその欲求が満たされる状態である。にもかかわらず生きていく限り、それは満たされることはない。なぜなら人間が不幸にも罪を犯したからだ。しかしながら永遠の幸福の記憶が人間に残されている。だから人間はこれをこそ、一時的でなくいつまでも求め続ける。愛である神は、その望みを必ずかなえるであろう。

がんの末期だった父の内には、生きたいという望みがありました。それは永遠のいのちへのあこがれであったと思います。父は言いました。「いのちへの望みは、パスカルがいうように、愛そのものである神自身が、我々人間の心に刻み与えたものです。だからその望みは必ずかなえられるのです」

それを聞きながらわたしは、なぜ父がデカルトと同時にパスカルを熱心に研究したか、なんとなく理解できた気がしました。父は講義を終えるとともに疲れた様子で「もう十分だね」と言いました。その約1か月後、父は亡くなりました。

父の好きだった詩のひとつがオーストリアの詩人リルケの「秋」です。父は自らの著書「望郷の詩」(1993年新世社)で紹介しています。

木の葉落つ／遠くより散りくるごとく／み空の園の枯れしごとくに／はらはらと舞い落ちきる／小夜ふかく なべて星より／重き土 寂寥にむかいて 落つ／われらみな落つ。これの手もま

た落つ／見よ、他のものを。なべてのものに落下あり／されど ひとりの人ありて この落下をかぎりなく／やさしく そのみ手に 支えたもう。(星野慎一訳)

父は枯れて落ちていく木の葉に今の自分を重ね合わせたのかもしれませんが。わたしたちのいのちを最終的にやさしく慈しみ深く受け止めてくださる神がおられる。これこそ父が信じ続けたことです。わたしもこの信仰を父から受け継ぎました。永遠のいのちへの希望が人生の根底にあります。それは、神様がわたしたちに与えてくださる恵みの光なのです。

【お知らせ】

ラジオ局の手違いにより2/26に流されなかった松浦神父の話は4/30に放送されます。

毎週日曜日5:50~6:00AM放送
4月担当:大久保 武神父
ABCラジオ(朝日放送)AM1008/FM93.3
スマホアプリのradikoでも聴けます。